

小さかった蕾は度重なる刺激に赤く色づいてすっかりと熟し、存在を主張するようにピンと隆起している。

誘われるままに食らいつくと、頭のすぐ上で一際高い声が上がった。

口の中に含んだまま舌で転がすようにすると、普段のスクアールからは想像し難い、鼻に抜けるような甘い吐息が漏らされる。

わざとちゅぱちゅぱ音を立てて強く弱く吸い上げると、膝の上の小さな尻が恥ずかしげにふるふる揺れた。

ちゅううっと思いきり吸い上げてから一度唇を離し、愛撫を待ち望んでいるのであるもう一方へと顔を移す。今度は口に含まず、舌を出しその先端で優しく擦るように刺激した。

「ん、あ、あ、ふ、あ、ん、あ、あ、う!!」

膨らみがない分なのか、やたら感度のいい蕾を触れるか触れないかの微妙なタッチで弄っていると、スクアールが感極まったような声を上げてよがり出す。

ねだるような目を向けられるが、もっと確かな愛撫を与えることはせずに、蕾の側面だけをただ

ひたすらに柔らかく、つかず離れずの感触でじっくり責め立てていく。

それを左右交互に繰り返しているうちにふと気が付くと、スクアールは体をぐったりとさせ、何かを堪える様に腰をモジモジさせていた。

「下も弄って欲しいのか？」

息を吹きかけながらそう囁くと、細い体がビクン！と過剰なまでに反応を示す。

どうなんだ、と問うように覗き込むと、スクアールは潤んだ瞳を揺らしながらコクコクと小さく何度も頷いた。

ちゅつと額にキスを落としてから掴んでいた手首を解放すると、スクアールが腕を摩っている間に両手を細い腰の後ろに回して、手探りでドレスのホックをぶちっと外す。

続けてファスナーを下ろしながら小振りの尻を持って浮かせて、破いてしまわないようにそっとドレスを抜き取ると、白くて長い細身の足が目の前に露わになった。

手にしたままのドレスを床に投げ捨てようと、思い直して静かに自分の傍らに置くと、白い足の